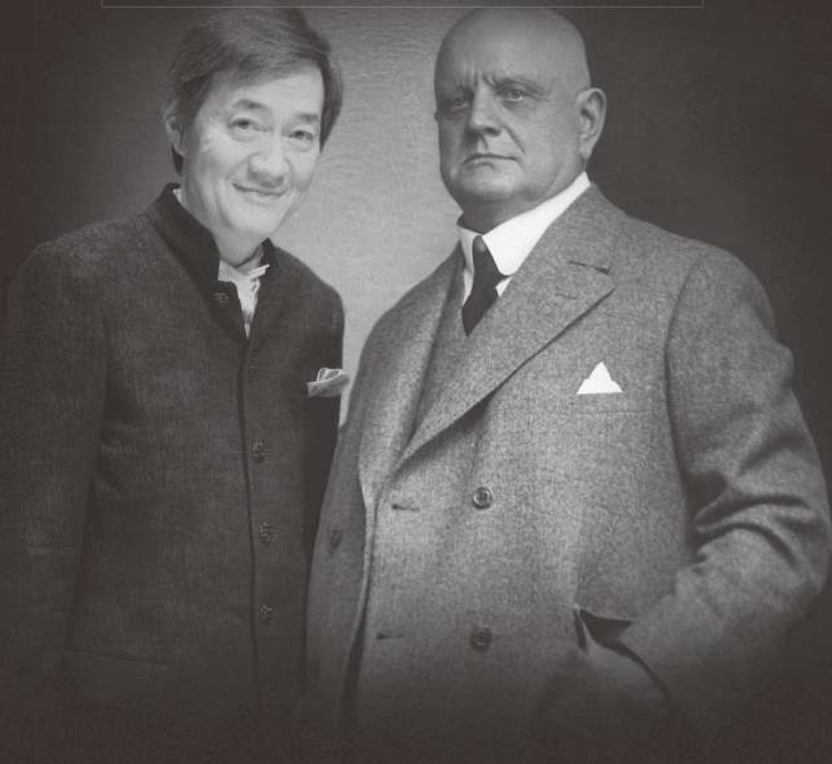


渡邊規久雄

ピアノ・リサイタル

～シベリウスを弾く Vol.6～
《作品番号のない小品集》



2023年11月12日[日] 14:30

東京文化会館小ホール

2:30p.m., Sunday, November 12, 2023 at Tokyo Bunka Kaikan Recital Hall

【主催】 ジャパン・アーツ

【後援】 フィンランド大使館／一般社団法人日本フィンランド協会
一般社団法人日本フィンランド文化友好協会／日本シベリウス協会
公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団／国際ピアノデュオ協会
日本ショパン協会／公益財団法人日本ピアノ教育連盟

Profile



渡邊 規久雄

Kikuo Watanabe, Piano

北欧、特にフィンランド音楽に造詣が深く、中でもシベリウスを生涯のライフワークとして演奏活動の中心に据えている渡邊規久雄。2003年から2019年まで5回にわたって歩んできたシベリウスのピアノ音楽全曲シリーズがすべてCD化され、シベリウス生誕150年記念の年であった2015年にはNHK-BSプレミアム『シベリウスの室内楽の世界』に出演、東京と大阪で行ったオール・シベリウス・プログラムによるリサイタルはNHK-FMで放送されるなど、常にシベリウス・ピアノ音楽の第一人者として活躍してきた長年の功績は、2015年12月にフィンランド・シベリウス協会から歴史と伝統ある《シベリウスメダル》が授与されるという栄誉に結実するまでに評価されています。

林美奈子、林秀光、梅谷進、アペイ・サイモン、ジョルジュ・シェボック、スタニスラフ・ネイガウスに師事。室内楽をヤーノシュ・シュタルケルに、作曲法を野田暉行に師事し、1974年インディアナ大学を成績優秀賞で卒業。ピアノ科助手を務め、1976年に同大学院を修了。1976年7月のデビュー・リサイタル以降、シベリウス作品はもちろん、ショパンのポロネーズ全曲、シューベルトの最後の3曲のソナタなどによるリサイタル、ラトヴィアの首都リガやヘルシンキ、トロント、東京、大阪、名古屋等での寺田悦子とのデュオ・リサイタル、国内はもとよりサンクトペテルブルク、モスクワ、ハバロフスクなどでのオーケストラとの共演（2016年5月日本フィル創立60周年記念公演でのモーツァルトや、2022年11月東京シティ・フィル定期公演でのヴォーン・ウィリアムス等、2台ピアノのための協奏曲にも積極的に取り組んでいます）、国際交流基金の音楽特使としての南米公演、ヴァイオリニストの千住真理子さんとのウズベキスタン、キルギス、カザフスタン公演など、国内外で精力的に演奏活動を行っています。

シベリウス・リサイタルのライブCD5枚、レコード芸術特選盤に選ばれるなど高い評価を得ている寺田悦子との「デュオ・ピアノで聴く『春の祭典&ラフマニノフ』」、「シベリウスのヴァイオリン作品集I・II（ヴァイオリン：佐藤まどか）」などをリリース。最新盤は弦楽五重奏曲ハ長調（連弾版）など美しいシューベルトの連弾作品を収録した2023年6月「シューベルト 奇跡の1828年」と題した寺田悦子とのコンサートのライブ盤。

武蔵野音楽大学ピアノ科特任教授として、またドイツ・バイエルン州ズルトバッハ＝ローゼンベルクでの「インター・ハーモニー音楽祭」や、オーストリア・ザルツブルク州バート・ガスタインでの「ミュージック・イン・アルプス国際音楽祭」で演奏とマスタークラスを行なうなど、後進の指導にも情熱を注いでいます。大阪ザ・フェニックスホール音楽アドバイザーを務めています。

Program

ジャン・シベリウス (1865年12月8日~1957年9月20日)

Jean Sibelius (8 December 1865~20 September 1957)

6つのフィンランド民謡 JS81

- I: 私のかわいい人
- II: 心から君を愛す
- III: タベは来たりぬ
- IV: カンテレを弾く少女
- V: 兄弟殺し
- VI: 婚礼の思い出

6 Finnish Folksongs JS81

- My darling
- From my heart I love you
- The evening is coming
- The maiden is playing the Kantele
- The fratricide
- The wedding remembrance

あこがれに JS202

Till tranaden (To Longing), JS202

コン・パッショーネ JS53

Con passione, JS53

O. パルヴィアイネンに JS201

Till O. Parviainen (To O. Parviainen), JS201

ワルツ 変イ長調「ベツツイ・レルケのために」JS1

Waltz in A-flat Major, JS1, "A Betsy Lerche"

ラルゴ イ長調 JS117

Largo in A Major, JS117

スケルツォ 嬰へ短調 JS164

Scherzo in F-sharp Minor, JS164

アンダンティーノ ホ長調 JS41

Andantino in E Major, JS41

アレグレット ト短調 JS24

Allegretto in G Minor, JS24

組曲「フロレスタン」JS82

Florestan, JS82

休憩 20分 Intermission 20min

アレグロ HUL 0768/3

Allegro HUL0768/3

アダージョ ニ長調 JS11

Adagio in D Major, JS11

モデラート〜プレスト JS133

Moderato and Presto, JS133

ピウ・レント〜ワルツのテンポで 変ホ長調 JS150

Piu lent - Tempo di valse in E-flat Major, JS150

アレグレット ホ長調 JS21

Allegretto in E Major, JS21

アレグレット へ長調 JS23

Allegretto in F Major, JS23

アレグレット 変口短調 JS18

Allegretto in B-flat Minor, JS18

スペイン風に JS181

Spagnuolo, JS181

アンダンティーノ ロ長調 JS44

Andantino in B Major, JS44

ワルツのテンポで イ長調 JS2

Tempo di valse in A Major, JS2

黄昏時に JS47

Au crepuscule in A-flat Major, JS47

アダージョ ホ長調 JS13

Adagio in E Major, JS13

交響詩「フィンランディア」Op.26 (作曲家自身の編曲によるピアノ版) "Finlandia" Ton-poem Op.26 (edition for solo piano arr. by Jean Sibelius)

Program Notes

神部 智 (国立音楽大学教授・副学長)

作品番号のないシベリウスのピアノ曲

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス(1865~1957)は、かつてヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ(名演奏家)を目指していた。唯一残されている独奏楽器のための協奏曲も、ヴァイオリン協奏曲である。ウィーン古典派以降、多くの作曲家がピアノを自分の楽器として創作活動を行ったのに対し、シベリウスの音楽的発想が「ヴァイオリン的」といわれるのはそのためだろう。

しかし、シベリウスは初期のハメーンリンナ時代から1930年代初頭の晩年に至るまで、全ての時期で継続的にピアノ曲を創作している。その数はおよそ150曲に上り、ヴァイオリン曲よりも遥かに多くの作品を残しているのである。シベリウスにとって、ピアノという楽器は私たちが想像する以上に身近な存在であった。そんなシベリウスが手掛けたピアノ曲の数々は近年演奏される機会が増え、その音楽的内容の素晴らしさから急速に再評価が高まっている。

シベリウスはあらゆるジャンルの作品を世に残し、その曲数は膨大である。一般に演奏されるのは、いわゆる作品番号(作品1やOp.2と記される)が付されているもの、つまり印刷・出版された曲である。一方、シベリウス作品の中には存命中に出版されなかったものも実は数多くある。近年そうした未出版曲の調査、整理が大きく進展した。そして、それらの作品にシベリウスのイニシャルの「JS」という作品目録番号が付され、公表されると共に一部は出版もされるようになった。またスケッチなど、曲として完結していない草稿は「HUL」番号(HULはヘルシンキ大学附属図書館[現フィンランド国立図書館]の略)に分類され、それらも少しずつ知られるようになってきた。

今回演奏されるのは、そのほとんどが作品番号のないシベリウスのピアノ曲、つまりJS番号とHUL番号が付された曲である。それらの小品は、まだほとんど世に知られていない。とはいえ、大作曲家シベリウスの手掛けた音楽である。その尽きせぬ魅力は後世による再発見が待たれている状況であり、今後は演奏される機会も増えるだろう。シベリウスの「作品番号のない小品集」を取り上げるマエストロ 渡邊規久雄氏の挑戦は、その嚆矢である。

《6つのフィンランド民謡》JS81

1902年から03年にかけて手掛けられた全6曲からなる小品集。シベリウスとしては珍しく、フィンランド民謡の編曲である。

広く知られているように、シベリウスは自作品にフィンランド民謡を直接借用することはなかった。したがって、この曲集はきわめて例外的な試みということになる。またシベリウスは、ハンガリーの作曲家バルトーク・ベーラ(1881~1945)のように科学的、学術的な観点から自国の民謡を分析したり、研究したりすることもなかった。シベリウスの芸術的姿勢はあくまでも詩人のそれだったのであり、この曲集全体を覆う抒情的な美しさは、自国の素朴な民謡に向けられた作曲家の温かい眼差しに満ちている。



アインラで寛ぐシベリウス夫妻(1915年)



1891年のアイノ(20歳)とジャン(25歳)。二人は翌年6月に結婚、その生涯を共にした。

作品番号のない数々のピアノ曲

JS番号やHUL番号が付された曲の多くは、シベリウスがヘルシンキ音楽院での修学時代(1885~1889)に手掛けられたものである。その後、1891年以降もJS番号の作品が残されているが、それらの中には雑誌に掲載されて広く知られるようになった曲や、他作品のためのスケッチに基づく曲もある。以下では年代順に沿って解説しよう。

ヘルシンキ音楽院時代、シベリウスはヴァイオリンの演奏技術の向上に多くの時間を注いだ。その間を縫うように数多くのピアノ曲を書いている。1887年からは音楽院の創設者マルティン・ヴェゲリウス(1846~1906)の下で作曲の勉強を始めており、作曲理論の習得のために取り組んだ曲もある。ただし、この時期のピアノ曲は未だ「作品」としての感覚は薄く、後のシベリウスの音楽を特徴付けているフィンランドの民族的要素もほとんど見出すことができない。



ベツツイ・レルケ(1869~1941)

メヌエットやワルツなどの舞曲は数が多く、《ワルツ 変イ長調「ベツツイ・レルケのために」》JS1、《ピウ・レント〜ワルツのテンポで 変ホ長調》JS150、《ワルツのテンポで イ長調》JS2などが挙げられる。JS1は後の妻アイノと結婚する前に交際していたベツツイ・レルケという女性のために書いたウィーン風ワルツで、彼女にプレゼントされた曲である。同じような記念作として、友人のアドルフ・パウルに捧げられた組曲《フロレスタン》JS82がある。4曲からなるこの組曲は、「フロレスタンという若者が美しいニンフに魅了されるが、姿を消してしまった彼女に失望して帰路につく」という儂い物語を標題音楽風に綴ったもの。《黄昏に》JS47は青年シベリウスがコロポという町に滞在していた時、彼の世話をしてくれたイナ・ヴィレニウス女史に捧げられた曲。《アレグレット ホ長調》JS21、《アンダンティーノ ホ長調》JS41も、友人への記念作である。

《アレグロ》HUL0768/3、《アダージョ ニ長調》JS11、《アレグレット 変口短調》JS18、《アレグレット ト短調》JS24、《アンダンティーノ ロ長調》JS44、《ラルゴ イ長調》JS117、《モデラート〜プレスト》JS133は1888年から1889年にかけて作曲された。これらの多くは、作曲技術を磨くために取り組まれた曲と考えられている。

エネルギッシュな《スケルツォ 嬰へ短調》JS164は、同じスケッチ帳に管弦楽曲《バレエの情景》JS163や《クレルヴォ》作品7の素材が見出されることから、1891年に作曲された可能性が高い。メヌエット調の《アレグレット へ長調》JS23は、1894年から1896年の間に手掛けられた。

後年の1907年から1919年にかけて作曲された作品は、《アダージョ ホ長調》JS13、《スペイン風に》JS181、《あこがれに》JS202、《コン・パッショーネ》JS53、《O. パルヴィアイネンに》JS201である。1907年作のJS13は、弦楽四重奏曲《親愛なる声》作品56の第3楽章と同じ素材が使われている奥深い曲。JS181とJS201は、1913年に発刊された雑誌に掲載されたもの。いずれも個性豊かな曲である。JS53とJS201は、1919年に友人オスカー・パルヴィアイネンの求めで書いた曲。興味深いことに、JS201はシベリウスのピアノ曲《ソネット》作品94の3と同じ旋律が用いられている。



フィンランドの画家・版画家オスカー・パルヴィアイネン(1880~1938)



友人の作家アドルフ・パウル(1863~1943)

交響詩《フィンランディア》作品26

1899年に初演された舞台劇『歴史的情景』より、第6の情景「フィンランドは目覚める」の付随音楽が原曲。翌1900年、ヘルシンキ・フィルのバリ万博遠征公演のプログラムに載せるため、シベリウスは同付随音楽を単独の交響詩《フィンランディア》作品26へと改編し、そのピアノ編曲版も合わせて発表した。

原曲の情景は、「ロシアの圧政に抗するフィンランド、その輝かしい未来」を描いたものであり、《フィンランディア》もその内容を受け継いでいる。抑圧と闘争、精神の躍動と人々の祈り、そして勝利の確信すべてが盛り込まれたこのドラマティックな作品は、シベリウスの代表作として、今なお世界中で広く愛聴されている。